

CEL

特集[コスモロジー—人間—人間とは何か]

CULTURE, ENERGY AND LIFE

SPECIAL EDITION : HUMAN COSMOLOGY-THE ESSENCE OF HUMANITY

30

VOL.30 OCTOBER.1994



CEL

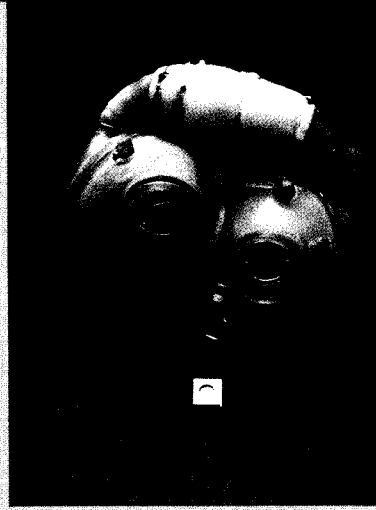
CULTURE, ENERGY & LIFE

VOL.30

OCTOBER, 1994

SPECIAL EDITION
HUMAN COSMOLOGY

— THE ESSENCE OF HUMANITY



PUBLISHER
YASUSHI SANTO
EDITOR IN CHIEF
SUSUMU FURUTACHI
ICHIRO TAKANASHI
ART & EDITORIAL DIRECTOR
TOSHIKI ISHIZUKA

COPYRIGHT
© 1994 OSAKA GAS CO.,LTD.
PRINTED IN JAPAN

CONTENTS

特集 コスモロジー人間—人間とは何か

官能的なマテリアリスト—エドワード・ウエストン	ロバート・ビエック	8
バスレラに生きる子供たち—中米・ニカラグアからの報告	宇田 有三	12
人間・宇宙・構造	藤田 博史	16
人間性の誕生。心の進化。	山鳥 重	21
神話に見る人間の起源	吉田 敦彦	26
生物としての人間の起源	尾本 恵市	30
芸術にみる人間の誕生	木村 重信	34
人はなぜ人を愛するのか	大島 清	37
人と人との距離—より快適な人間関係を求めて	渋谷 昌三	40
知の老化	下仲 順子	43
脳とコンピュータ	松本 元	47
カウンセリングから見た人間の心	結城 真子	52
◎人間とは何か—「南」の風を感じる時	池田 知隆	55
身体、この遠きもの	鷲田 清一	59
CEL対談	中西 進	62
洗うとは新しくすることなのです	倉光 弘己	

CEL SERIES

CELからのメッセージ	山藤 泰	72
CEL研究プロジェクト 住まいの生活学⑦ 楽しいバス・ライフ	古館 晋	73
CEL研究プロジェクト なにわの仕掛人打ち明け話 ～～心寺シアターを語る～	倉光弘己 吉元常洋 栗本智代	77
「なにわの語りべ」養成講座 第一話 大阪は石山本願寺から始まった	倉光 弘己	82
	第二話 梅田は西からやってきた	
新連載「新・日本風景論」第1回 富士の近景遠景	高田 宏	90
CEL美術館XXV	井上智香子	99
FROM EDITOR	高梨 一郎	104

表紙写真 美術画廊を訪れたこの男は、17世紀オランダのギルドの会合でテーブルの端に座っているように見える。製作する人間にとっては、美術は自分の仕事である。たいていの人間にとっては、美術を鑑賞することは他の人の眼を通して世界を見る貴重な機会である。

◎写真/長島義明、文/ロバート・ホワイト

裏表紙写真 DNAの構造図 ©M.STUCKEY

目次写真 人工心臓 ©E.HARTMANN



海上にある巨大遺跡、ナンマドールの神殿。いつ、だれが造ったのか、ナゾのまま。(撮影・宇阪盛昭)

人間とは何か

『南』の風を感じる時

池田知隆

WRITTEN BY TOMOTAKA IKEDA

リヤンテルさんは、いま、どうしているだろうか。

世界にはさまざまな国、そして文化がある。人びとの暮らしは多彩で、その「幸福感」も実に多様だ。日本と世界、風土と人間のあり方について、ぼんやり考え始めたとき、ふと、エアラス・リヤンテルさんの人なつっこい日焼けした笑顔が浮かんだ。太平洋に浮かぶ小さな島々、ミクロネシアにあるポンペイ(ポナペ)島の島民牧師だ。

あのまぶしい南洋の光。深い記憶の闇から一瞬、その光がさしこめ、その織りなす幻のようにリヤンテルさんがぼくの前に現れた。

「ところで、少しは人間のことがわかったかい」

× ×

リヤンテルさんに出会ったのは一九八〇年十二月のこと。当時、七十七歳と聞いていたから、まだ生きていたら、九十歳を超えている。

新年の新聞紙面を飾る連載企画の取材で島を訪れたものの、何の手がかりもなく、オロオロしているときだった。八〇年代の日本と世界がどうなっているのか、

太平洋の島から考えてみよう、との思いだけが先走っていた。たまたま島で知り合ったリヤンテルさんは、「なにも、そうあせることはないよ」といわんばかりに、物静かで、いつもにこにこしていた。

ポンペイは、カロリン諸島に属する火山島で、雨が多く、「ミクロネシアの花園」ともいわれるきれいな島だ。カロリンという言葉から、子供のころの人気テレビ番組「チロリン村とクルミの木」のチロリン村を思いだし、天国に近い夢の島かな、という期待感があった。そしてまずは島の南東部の珊瑚礁の上にある巨大遺跡、ナンマドールのナゾに迫ってみよう、と思った。「南海に消えた廃墟に立てば、何が見えるだろうか。そう、幽霊に会えるかもしれない」

島の中心部、コロニアからボートで約一時間。その途中は、まるで雲の上を飛んでいるようだった。虹色のガラス板を敷きつめたようなラグーン(礁湖)は、積乱雲を七色に映しだして、眼下に広がっていた。あのテレビ人形劇「ひよっこりひよたん島」そっくりの緑の小島をいくつか抜けたところに、ナンマドール

はあった。

あつ、と息をのむほど、すさまじいばかりに朽ち果てた廃墟だった。熱帯の狂暴な気候で石壁はいたるところ崩れ落ち、マンングローブの幹から抜け出た根が、タコの足のよう複雑にからみあい、巨石を覆っていた。ちょうど東京・霞が関一帯を海に沈めたぐらいの広さに、人工島が約九十。巨石は一つで重さ数十トンに及ぶものもある。その数はざっと数百万個。

何が島民を数十年、数百年がかりの労働にかりたてたのか。島の労働力からみると、現在の島の二十倍の陸地が沈没したと仮定しない限り、ナンマドールを築くのは太平洋の奇跡だ、という学者もいる。伝承によると、巨石が空を飛び、集中落下してできたといひ、島民は悪霊にとりつかれると、近づこうとはしない。

× ×

パラダイスの語源はペルシャ語で、「壁をめぐるした庭」という意味だといふ。壁さえあれば、その内側に美しい理想と文明を築きあげることができるといふのである。そうすると、巨石で囲ったナンマドールは海の楽園、竜宮城だ。

だが、この人工島のいくつかは未完成で、島民たちが巨石を運ぶ途中、ふいとそれを捨て置き、消えてしまったようである。石工たちが昼食を摂りに行ったまま帰ってこない、といった状態で残されているイースタ島のモアイ、住民が一瞬のうちに大移動したマヤ帝国の都市。みんな、どうして突然、いなくなったのか。疫病か、自然災害か、外敵の侵入か、宗教改革か。あれこれ推理をめぐらしながら、遺跡を突き抜けること、不意に甲高い声が聞こえた。

「カセレリア（こんにちは）！」

約二〇〇メートル沖の珊瑚礁で魚をとっていた若者たちの声だった。死の国から生の世界へ戻ってきたこ

とを告げるかのように、明るい響きに満ちていた。ぽくも大声で手をあげて叫んだ。

「カセレリア！」

そのとき、ぼくは思った。島民たちは、ナンマドール文明に反逆したのではないかと。ヨーロッパに「都市の空気は人間を自由にする」ということわざがある。海上都市の島民に自由はあったのだろうか。いや、そこには石を積むだけの無限の苦役がなく、そんな形で一生を終えるのを一瞬のうちに拒否したようにも思える。ナンマドールが人間を「機械化」した「悪霊」に見えてきた。

そんなぼくの感想を、リヤンテルさんはたどうなずいて聞いていた。

× ×

浜辺のヤシの葉陰で、若者が昼間からゴロリと寝ている。通りがかりの老人が言った。

「いい若者がなんだ。起きて働いたらどうだ」

若者「働くとうどうなるの？」

老人「働くとお金がもらえる」

若者「金をもらおうとうどうなの」

老人「お金をもちになるとどうなの」

若者「お金をもちになるとどうなの」

老人「金持ちは寝て暮らせるじゃないか」

若者「でも、もう寝て暮らしていません」

夢だった。どこかで聞いた落語の一節のようでもある。でも、どうして私たちは働いているのだろうか。働かないために働いているのだろうか。

「おい、起きろ。結婚式だぞ」

同行していたカメラマンのO記者が、部屋に飛び込んできた。あわてて飛び起きると、新郎新婦は教会で式を終え、村に帰る途中。後を追った。披露宴が催される村の集会所には八方から女たちがダンボール箱や



ナンマドールの遠景（撮影・筆者）

バケツを抱え、続々と集まってきた。バケツの中にはパンやカン詰め、とれたばかりのカツオなどがぎっしり。ブタやイヌを石焼きにし、男たちは、コシヨウ科の木の根を砕いて絞らだした泥水のような酒、シヤカオをくみかわす。花嫁の養父にあたるナンマルキ（大曾長）が戦前、大本教に入信していた縁で、日本から大本教関係者二人が出席していた。

料理のほとんどが出席者の持ち寄り。パンの実がたわわに実り、数人がかりでもかかげないような巨大な山イモがとれ、金はなくても飢えることはない。島は五つの村からなり、それぞれナンマルキが治めている。村人たちは約三百の階級で序列化され、周囲から尊敬されるためには、働いてナンマルキに贈り物をして位をもらわなければならない。位をもらおうと村人はカマテツプ（宴）を催し、ナンマルキは贈り物を全体に分配する。これが「ぐうたら天国」のメカニズムで、村に三百世帯もいれば、毎日が宴会みたいなものだ。しかし、ナンマルキといえども、時代の流れには勝



ボンベイの結婚式。料理をみんな持ち寄って、大にぎわいだ。(撮影・宇阪盛昭)

てない。「昔のナンマルキは妻を二、三人持てたが、いまはダメ。みんなクリスチャンになったためです。ナンマルキの仕事も警察、裁判所が肩代りするようになった」とリヤンテルさんはいっていた。

「日本統治時代は仕事を与え、叱ってくれた。アメリカは、金をくれるだけで、みんな享乐的になるばかりだ」

若者たちを労働にかりたてるのは、金以外の何だろうか。どうして昔、何かにつかれたように島民はナンマドールを築き始めたのだろうか。ナンマドールのナゾはそのまま人間の心のナゾかもしれない。

× ×

ボンベイは東京から南南東約三八〇〇キロの海のかなたにある。昔、日本人がはるばる海を渡ってこの島に海上都市を築いたという口伝者が島にいた。いわゆる「タメトモ伝説」である。滝沢馬琴「椿説弓張月」(ち

んせつゆみはりづき)で知られる、あの鎮西八郎為朝である。保元の乱(一一五六年)に敗れた源為朝は伊豆大島に流されて死んだとされているが、ほんとはこの島に流れつき、王宮、ナンマドールを築いたというのだ。東北地方から大陸に渡ってジンギスカンになったという源義経の伝説とよく似た話である。日本統治(一九一四—一九四五)のなごりなのか、それともそれ以前からの伝承だろうか。狂言「首引」の中で鬼の姫と首を引つ張り合い、八丈島には巨石で鬼を生き埋めにした説話を残す怪力の為朝はいかにも巨石遺跡のナンマドールにふさわしい人物ではあった。

日本に南洋人が漂着しただけでなく、日本から南島に流れついた話は数多い。タメトモ伝説は奄美大島、喜界島にもあり、沖繩では、為朝が伊豆で舟遊びしているとき、暴風雨にあつて沖繩まで流され、島の娘との間に琉球王国の祖、舜天王をもうけた、といわれる。

この「タメトモ伝説」を通じて、ナンマドールは急速に身近なものになった。ふりかえってみると、瀬戸内から巨石をイカダに乗せて運び、大阪城を築いた日本人には南島人と同じ血が流れているようだ。古代史に深い関心を寄せる地球物理学者、竹内均・東大名誉教授はいう。「古代人の航海術は想像以上に優れたものだ。かつて太平洋にあつたといわれる「ムー大陸」はなかつたが、太平洋にまたがる「ムー文明」は確かにある」と。

かつて島民たちは、星と風と大自然に住む神々を羅針盤にして「国」を築いた。だが、十八、九世紀になって、欧米各国が「片手に十字架、片手に短剣」を持って、太平洋の島々をそれぞれの「宝の島」にしてしまった。欧米人が持ち込んだ性病、天然痘による大量死。スペイン、ドイツ、そして日本、米國と続いた二百年近い他國の支配。それは、島民から自治能力を奪

い、ナンマドールや過去の記憶さえも失わしめた。日本列島がボンベイのように異種の文明で繰り返し繰り返して侵されていたら、奈良や鎌倉の大仏もいまごろはナゾの巨像扱いにされていたかもしれない。

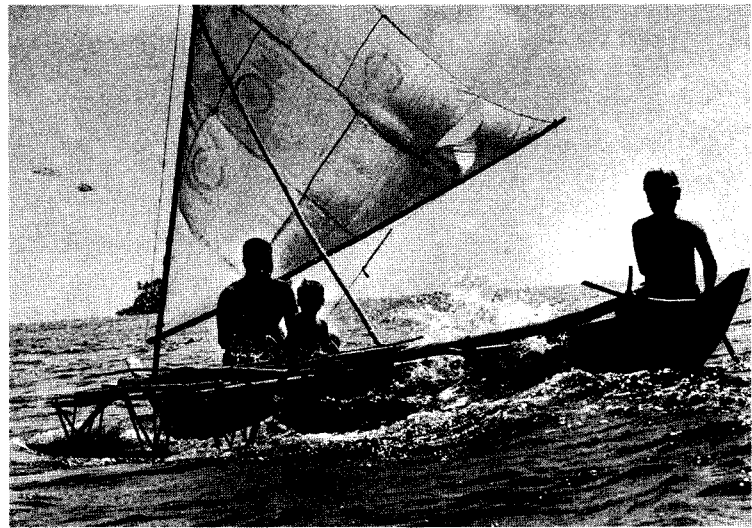
× ×

こんなことを書き綴った新聞連載が終わり、約半年ぐらい経ったころ、一冊の本が出版され、広く読まれるようになった。「パパラギ」はじめて文明を見た南海の酋長ツイアビの演説集(岡崎照男訳、立風書房)。二十世紀の初め、ヨーロッパを旅した西サモアの島に住む酋長の演説を、ドイツ人の編集者が出したものだが(原書は一九二〇年刊)。パパラギとは「白人」の意味で、ツイアビはパパラギの服装、都市、職業、暮らし、経済、都市、機械文明を素朴な目で批判している。例えば、「都市」についてこう書いている。

「パパラギは巻き貝のように堅い殻の中に住み、溶岩の割れ目に住むムカデのように、石と石の間で暮らしている」と。さらに、一つの石の箱(建物)には、サモアの一つの村くらいの人数のパパラギが住んでいて、石の箱の間には木のないことが多い。太陽の光と風の通りは悪く、常に埃と砂が降り、通りの人の波は途切れることがなく、騒音がひどくて割れ目人間は叫びあっている。そしてツイアビはいう。「心迷える病氣の人たちだけが、日もなく光もなく風もない石の割れ目で幸せになれるのだ」

ツイアビが批判した二十世紀初めのヨーロッパの文化と生活様式が「近代化」という形で世界を覆い、いまも「開発」という言葉に変えて浸透している。

もちろん「南洋の共同体のような社会がすべて」といいたいわけではないが、どうしてかいまも、このツイアビの問いかけは胸を突く。このままでは地球の環境問題は解決できないことはわかっているが、その手



海は無限の自由な交通路。船を自在に繰るポンペイの人たち。(撮影・宇阪盛昭)

だてはなかなか見つからない中で、「私たちはなぜ、このような科学技術文明を選んでいるのか」と突きつけてくるからだ。さらにまた「私たちははたして、どのような社会で、どのように生きることを望んでいるのか」と。

二年前、「若者」と「宗教」をめぐる取材をしていて、通産省のシンクタンク、地球産業文化研究所の研究報告書を目にした。

その中の「一九九〇年代日本の責務」と掲げられた冒頭の総論で、「近代産業社会は物質的に豊かになったけれども、精神的には貧しくなった」という疑問がでてきたことに触れている。もし、その心配が適中しているのなら、「世界の経済社会開発を、政府開発援助(ODA)という形で支援している国は、他ならぬ日本なのである。したがって(略)、日本は、世界を挙げて精神的に貧しい時代に突入するための、ツアーガイド兼スポンサーになってしまう」とある。さらには「産

業社会において精神的な豊かさをどう実現していくかは、今日の日本に生きる私たちに課せられた歴史的な使命」と述べているが、日本人自身、どのように生きることが幸福なのかは、はっきりと見えていない。病も貧困も死も老いも見えにくくなった豊かなニッポン。若者たちは「宙吊り」になったような手応えのない日常からの脱出に憧れ、「自分探し」に精神遍歴を続けていた。そんな「現実」から浮揚していく若者の姿が、そのまま「世界」から浮揚するニッポンと重なって見えてきた。私たちの社会はいま、どのような幸福観をもちうるのか。

× ×

ポンペイをたつ日、島の空港待合所には約二百人の老若男女が群がっていた。そのころ、週三日発着していたコンチネンタル航空の乗客を迎えにきたのでも、見送りにきたのでもない。ここは世界に通じる島唯一の窓。退屈しのぎに遊びにきているのだった。ひまつぶしに編んだ花の冠を島を訪れる異邦人にかぶせてははしやぎ、ちよっとしたお祭り騒ぎだ。トタン屋根をふいただけの丸太小屋だったが、ここほど親愛の情にあふれた空港風景は見たことがなかった。

「カセレリア！」

そのやさしい響きに満ちた声の主は、リヤンテルさんだった。自宅から一時間も歩いて、見送りに来てくれた。「もうあなたには生きて会えないでしょうから」彼の自慢は昭和十一年、ポンペイ代表二十八人からなる日本視察団の一員として、海を渡ったことだった。東京・九段の軍人会館に宿泊し、京都、大阪を見学したその旅が、島の外に出た唯一の体験だった。そして日本から帰る船の中で、視察団のみならずつくった「アロハオエ」の替え歌を気持ちよさそうにぼくのために歌ってくれた。

「大阪 お変わりない
京都 今日で最後
名古屋 お名残惜しいことで
横浜 よろしく頼む
太平洋 ごきげんよう
新宿 死ぬまで忘れません
……」

歌い終ると、リヤンテルさんは「私は何もあげるものはありません」とさびしそうにいうと、麦ワラ帽子をぬぎ、ぼくに差しだして「これしかないんです」。ぼくはうれしくて、言葉がでなかった。その帽子は、小さすぎて頭にのせることしかできなかったが、ぼくは風で吹き飛ばされないように手で押さえながら飛行機のタラップをのぼった。

× ×

それから、十四年経った。リヤンテルさんの息子で島の小学校長、エルシンさんが、ポンペイの小学生数十人を連れて来日したことを風の便りに聞いた。日本とポンペイの人々の交流も進んでいる。

いま日本では、これまでになく、アジア、太平洋への関心がたかまっている。そこにどんなユートピアを描き、どのような関係をつくりあえるのか。地球全体の情報化が進み、テレビでは毎日、世界の暮らしの隅々をまるで隣村のことのように伝える番組であふれかえっている。だが、おたがいの親愛の情は深まっているのだろうか。そういえば、「情報」というのは、「情(なさけ)」に「報(むく)」いる、とも読めるのだが……。リヤンテルさんのあの帽子。帰国後ずっと、部屋に置いていたが、何度か引越越しているうちに消えてしまった。あの帽子はいったい、どこにいったしまったのだろうか。

(毎日新聞大阪本社学芸部副部長)